

- tion of the Asian and Oceanian Physiological Societies) Congress. Kobe, Mar.
- 16) Nishijo T, Momiyama T. (Poster) 5-HT-induced inhibition of excitatory transmission onto basal forebrain cholinergic neurons. 9th FAOPS (Federation of the Asian and Oceanian Physiological Societies) Congress. Kobe, Mar.
- 17) Shimuta M, Sugihara I (Tokyo Med Dental Univ), Ishikawa T. (Poster) Cerebellar integration of neocortical somatosensory signals. 9th FAOPS (Federation of the Asian and Oceanian Physiological Societies) Congress. Kobe, Mar.

病 理 学 講 座

講座担当教授：	池上 雅博	人体病理学：消化管の病理
教 授：	鈴木 正章 (病院病理部に出向中)	人体病理学：泌尿生殖器，乳腺の病理
教 授：	清川 貴子 (病院病理部に出向中)	人体病理学：産婦人科の病理
教 授：	鷹橋 浩幸 (病院病理部に出向中)	人体病理学：泌尿生殖器の病理，分子病理学，診断病理
准 教 授：	千葉 諭	人体病理学：肝，骨髓，循環，脾，胎生形態学の病理
准 教 授：	野村 浩一 (病院病理部に出向中)	人体病理学：産婦人科の病理
准 教 授：	濱谷 茂治	人体病理学：消化管の病理
講 師：	遠藤 泰彦 (富士市立中央病院に出向中)	人体病理学
講 師：	原田 徹 (病院病理部に出向中)	人体病理学：呼吸器疾患，肝疾患の病理
講 師：	鹿 智恵	分子病理学
講 師：	小峯 多雅 (厚木市立病院に出向中)	人体病理学：肝臓，腎臓の三次元的構造解析

教育・研究概要

当病理学講座における研究の目的は，形態学を基盤として病気の原因，形態学的変化を追及することにある。使用する材料は，剖検および外科的に切除あるいは生検された人体材料である。これらを，光学顕微鏡，電子顕微鏡，形態計測，免疫組織化学，分子病理学等の手段を用い検索した。

I. 消化管に関する研究

1. 胃の粘膜下層浸潤癌 (SM 癌) のリンパ節，肝転移予測因子の検索のため，当院で 2004~2015 年までの間に，内視鏡的および外科的に切除された胃の粘膜内癌 (M 癌) および SM 癌 578 病変を検討した。これらの内 SM 癌は 230 病変 39.8%であった。SM 癌に関しては，代表切片に対して，特殊染色 elastica van Gieson (EVG) 染色および免疫組織化学的染色 CD31, D2-40, MIB-1 抗体を行った。潰瘍の有無，隆起・陥凹の有無，大きさ (20mm 以下，以上) 浸潤実測値 (500 μ m 未満，500 μ m 以上)，

浸潤部組織型、浸潤様式、脈管侵襲：リンパ管侵襲(+/-)、静脈侵襲(+/-)、脈管侵襲の原発巣内での位置と個数、脈管内での癌腫の形態(個細胞性/胞巣形成性)等の項目を転移危険因子として設定し、データを抽出し、今後多変量解析を行う予定である。

2. 大腸 SM 癌のリンパ節転移予測因子の検索のため、2009～2015年までの大腸 SM 癌 124 症例の HE 標本を検討した。SM 以深の重複癌を除く 102 症例を抽出し、代表切片に対しては特殊染色、免疫組織化学的染色を行なった。陥凹の有無、粘膜内増殖態度(NPG, PG)、浸潤実測値(1,000 μ m 未満, 1,000 μ m 以上)、浸潤部組織型、簇出の有無(+/-)、脈管侵襲：リンパ管侵襲(+/-)、静脈侵襲(+/-)、脈管侵襲の原発巣内での位置と個数、低分化型腺癌や粘液癌の混在の有無、簇出、脈管内での癌腫の形態(個細胞性/胞巣形成性)等の項目を設定し、データを抽出し、今後多変量解析を行う予定である。

3. 大腸神経内分泌腫瘍における組織学的特徴について研究した。特に 2010 年 WHO 消化器腫瘍分類における Grade 分類と脈管侵襲および予後との関係について検索した。外科的切除および内視鏡的切除を施行された大腸カルチノイド腫瘍を用い、HE 染色に加え、elastica van Gieson (EVG) 染色および免疫染色(CD31, D2-40, MIB-1 抗体)を行った。各病変を Grade 分類に従って分類し、腫瘍径、深達度、粘膜下層浸潤距離、核分裂数、Ki67 指数、脈管侵襲について検索した。脈管侵襲を初めとするこれらの危険因子と予後との関係性について検討する。当院での内視鏡例 139 例および手術例 21 例、合計 160 例の症例を対象として、現在解析中である。

4. 小腸クローン病の手術検体を全割し、類上皮肉芽腫と潰瘍の存在部位をマッピングし、肉芽腫の壁内での分布および肉芽腫と潰瘍の位置関係を検索した。総計で 385 個の肉芽腫が認められ、粘膜内に 1.3%、粘膜下層に 19.8% の割合で分布していた。97.1% の肉芽腫は、水平方向で潰瘍から 10mm の範囲内に存在していた。クローン病を正診するためには、潰瘍から 10mm の範囲内で、粘膜下層を含めた生検組織の採取が望まれる。

II. 泌尿生殖器に関する研究

1. 前立腺癌生検検体でグリソンスコア 3 + 4 = 7 の症例において、生検におけるグリソンパターン 4 の割合やその他の生検パラメーターが、前立腺全摘術検体における予後予測因子としての有用性であるか否かについて比較検討した。生検におけるグ

リソパターン 4 の割合が 5 % 以上の症例では、全摘検体における悪性所見、生化学的再発のリスクがグリソンスコア 3 + 3 = 6 の症例と比較して上昇していた。

2. 尿路上皮癌 148 症例について HER2 過剰発現の有無および免疫組織化学的亜型分類を検索し、臨床病理学的因子との関係を検討した。その結果、14% の症例に HER2 タンパク過剰発現あるいは遺伝子増幅が認められた。さらに、全ての症例は免疫組織化学的に basal subtype と luminal subtype に分類され、HER2 タンパク過剰発現あるいは遺伝子増幅を伴う腫瘍は basal subtype の 4%、luminal subtype の 22% を占めていた。

III. 女性生殖器に関する研究

1. 新たな子宮頸部腺癌組織分類の構築を目的とした国際共同研究に参加し、以下の結果を得た。

1) 組織亜型診断時の免疫組織学的検索のアルゴリズムを完成し、論文は以下に投稿した (Am J Surg Pathol 2018; 42(8) : 989-1000)。

2) 浸潤形式は、HPV 関連子宮頸部腺癌ではリンパ節転移リスクの予測因子であるが、HPV 非関連子宮頸部腺癌では予測因子とはなりえないことを明らかにし、論文は以下に投稿した (Gynecol Oncol 2018; 150(1) : 56-60)。

3) HPV 関連子宮頸部腺癌と非関連子宮頸部腺癌の臨床像をあきらかにし、論文は以下に投稿した (Am J Surg Pathol 2019; 43(4) : 466-74)。

4) 比較的稀な組織型である子宮頸部腺扁平上皮癌の組織学的、免疫組織学的、臨床的特徴について検討し、論文を以下に投稿した (Mod Pathol 2019; 32(2) : 269-79)。

2. 子宮体部腫瘍のうち極めてまれな組織型である PEComa の国際共同研究に参加し、組織像と予後の関係を明らかにし、論文を以下に投稿した (Am J Surg Pathol 2018; 42(10) : 1370-83)。

3. 昨年に引き続き当院における子宮内膜癌肉腫の診断精度と予後について産婦人科と共同研究を行った。若年者にも発生すること、その場合組織学的に高異型度成分と低異型度成分が混在することが明らかにした、現在論文を作成中である。

IV. 呼吸器に関する研究

肺扁平上皮癌の発生過程における 3p22 領域の欠損と意義：肺扁平上皮癌の発生過程において、3 番染色体短腕領域 (3p) の欠損は最も早期かつ高頻度に発生する染色体領域であることから、3p には

腫瘍抑制遺伝子の存在が推測されていた。しかし、この3p領域には既知の遺伝子として少なくとも500種類以上が存在している中、発がんに関連する候補腫瘍抑制遺伝子の局在領域すら未だに明らかにされていない。一方、マイクロサテライト不安定性(MSI)解析法は、染色体上にある遺伝子の近傍に存在するマイクロサテライトマーカーを用いて標的遺伝子の局在を突き止める最有力な検索方法として知られている。我々は肺扁平上皮癌の発生と最も関連する3p領域を突き止める目的で、外科手術より得られた81例の肺扁平上皮癌の未染色FFPE(ホルマリン固定後パラフィン包埋)切片から癌部と非癌部組織をマイクロダイセクション法により採取した。それらの組織からDNA抽出を行い、3pにある18のマーカーを用いて網羅的にMSI解析を行った。その結果、非癌部組織と比べ癌部組織において、18のマーカーのMSI頻度は6~39%であったことを明らかにした。そして、18のマーカーのうち、MSI頻度が最も高いのは3p22(39%)領域であったことから、肺扁平上皮癌の発生と関連する腫瘍抑制遺伝子が3p22領域に存在している可能性が高いと考えられる。

V. その他

1. 肝小葉の半径の加齢性変化を中心に、解剖例を用いて、肝臓の組織計測を行った。肝小葉の半径(y)は年齢(x)とともに増加し、40歳以上では $y = 0.0032x + 0.3167$ で R^2 は約0.65と比較的高い相関が得られた。

2. 右下肢の劇症型A群溶連菌感染の解剖例を経験した。感染部では細菌は多数存在したが炎症はほとんどなかった。文献上では、劇症型A群溶連菌感染では局所の炎症を認めないかごく弱いことが判明した。本症例ではMタンパクの検索などは行わなかったが、文献的にはヒアルロン酸莖膜の存在、Mタンパク、C5aペプチダーゼ、核酸分解酵素などが炎症抑制的に働くと記載されている。

〔点検・評価〕

例年通り、病理学講座では主として卒前・卒後教育、病院病理部では診断業務が遂行された。講座教員は、3年生、4年生の講義と病理学実習、3年生のコース研究室配属、その他を担当し、きめ細かな教育・指導を行った。病院病理部出向教員は、16,902例の病理組織診断、14,310例の細胞診断、37例の剖検診断などをはじめとする病理診断を主軸とする業務に携わり、これを遂行した。さらに講座・

病理部出向教員が協同して、臨床各科との症例検討会、個々の症例に関する臨床医とのディスカッションを通して、医療に貢献した。

ここ数年、人員増が続いている。次世代に向け、良質の病理医を育成することは講座・病院病理部共通の一大目標であり、この目標に従って行動計画を練り、教育・研究・診療のバランスがとれた病理医を育てることに對して教授以下スタッフ一同で努力した。また人員の増加に伴って、病院病理部で勤務していた若手医師を3分院や講座勤務へと異動することができ、更に外部施設に留学してもらうことができた。分院に出向した若手医師に対しては、週1回の本院病理部勤務日を設けることにより、本院でやり残した業務を継続することができるとともに、指導医との良好なコミュニケーションを図ることもできた。次年度も2名の入局者が予定されており、数的な充実にもなって、より一層の教育・指導体制の強化が望まれる。

上記のような基本体制であるが、実情としては、講座教員は病院病理部での診断の一部を担い、逆に病理部出向教員も講義・実習の一部に参画するという「相乗り」業務が行われた。これは一見、非効率のように思えるが、現在の指導者層、中間層の人員の関係、個々の指導者の専門性などの観点から致し方ないものである。また、この体制により、講座教員は病理診断能力を継続することができ、逆に病理部出向教員も教育の重要性を日々認識し、スキルアップすることができるという利点もあり、引き続きこの方法で各々の業務を推進していくことになると思われる。

教育、診療における病理の重要性は日ごとに増しており、研究に割く時間的余裕がない、という状況が劇的に改善されることはなかったと思われる。しかしながら、人員増により、個人にかかるルーチンワークの負担は少しずつであるが、解消の方向にむかっている。例えば、分院出向の若手医師の中には、うまく時間を活用して本院時代の残務を完了し、研究を遂行してといった者も出始めている。また、ここ20年ほど課題であった、臓器疾患別の研究班の構築に関しても、徐々にではあるが、各々の分野においてその礎が築かれつつある。次年度に向けて、さらに指導者層、中間層、若手が一致団結して、研究体制を整備して、効率的に研究を遂行できる環境を整備していきたい。

研究業績

I. 原著論文

- 1) Stolnicu S, Barsan I, Hoang L, Patel P, Chiriboga L, Terinte C, Pesci A, Aviel-Ronen S, Kiyokawa T, Alvarado-Cabrero I, Pike MC, Oliva E, Park KJ, Soslow RA. Diagnostic algorithmic proposal based on comprehensive immunohistochemical evaluation of 297 invasive endocervical adenocarcinomas. *Am J Surg Pathol* 2018; 42(8) : 989-1000.
- 2) Bennett JA, Braga AC, Pinto A, Van de Vijver K, Cornejo K, Pesci A, Zhang L, Morales-Oyarvide V, Kiyokawa T, Franco Zannoni G, Carlson J, Slavik T, Tornos C, Antonescu CR, Oliva E. Uterine PECOmas : a morphologic, immunohistochemical, and molecular analysis of 32 tumors. *Am J Surg Pathol* 2018; 42(10) : 1370-83.
- 3) Atsumi N, Nakahira Y, Tanaka E, Iwamoto M. Human brain modeling with its anatomical structure and realistic material properties for brain injury prediction. *Ann Biomed Eng* 2018; 46(5) : 736-48.
- 4) Fukami Y, Kudo SE, Miyachi H, Misawa M, Wakamura K, Suzuki K, Igarashi K, Yamauchi A, Mori Y, Kudo T, Hayashi T, Katagiri A, Hamatani S, Sugai T. Diminutive intramucosal invasive (Tis) sigmoid colon carcinoma. *Clin J Gastroenterol* 2018; 11(5) : 359-63.
- 5) Akiyama M, Yamaoka M, Ohyama W, Yokoi K, Ashizuka S, Aizawa D, Ikegami M, Suzuki H, Ozaki K, Ida H, Yuza Y. Genetic profile and microsatellite instability in a case of secondary esophageal squamous cell carcinoma 12 years after allogeneic hematopoietic stem cell transplantation for aplastic anemia. *J Pediatr Hematol Oncol* 2018 Nov 28. [Epub ahead of print]
- 6) Kouyama Y, Kudo SE, Miyachi H, Ichimasa K, Matsudaira S, Misawa M, Mori Y, Kudo T, Hayashi T, Wakamura K, Ishida F, Hamatani S. Risk factors of recurrence in T1 colorectal cancers treated by endoscopic resection alone or surgical resection with lymph node dissection. *Int J Colorectal Dis* 2018; 33(8) : 1029-38.
- 7) Dobashi A, Goda K, Furuhashi H, Matsui H, Hara Y, Kamba S, Kobayashi M, Sumiyama K, Hirooka S, Hamatani S, Rajan E, Ikegami M, Tajiri H. Diagnostic efficacy of dual-focus endoscopy with narrow-band imaging using simplified dyad criteria for superficial esophageal squamous cell carcinoma. *J Gastroenterol* 2019; 54(6) : 501-10. Epub 2018 Nov 8.
- 8) Kobayashi H, Ariga M, Sato Y, Fujiwara M, Fukasawa N, Fukuda T, Takahashi H, Ikegami M, Kosuga M, Okuyama T, Eto Y, Ida H. P-Tau and subunit c mitochondrial ATP synthase accumulation in the central nervous system of a woman with Hurler-Scheie syndrome treated with enzyme replacement therapy for 12 years. *JIMD Rep* 2018; 41 : 101-7.
- 9) Takahashi H, Ogawa A, Inoue S, Yasaka R, Ohshima K, Ugaki M, Suzuki M. Complete genome sequences of seven peanut stunt virus strains from Japan. *Microbiol Resour Announc* 2018; 7(12) : e00952-18.
- 10) Stolnicu S, Hoang L, Hanko-Bauer O, Barsan I, Terinte C, Pesci A, Aviel-Ronen S, Kiyokawa T, Alvarado-Cabrero I, Oliva E, Park KJ, Soslow RA. Cervical adenosquamous carcinoma : detailed analysis of morphology, immunohistochemical profile, and clinical outcomes in 59 cases. *Mod Pathol* 2019; 32(2) : 269-79.
- 11) Fukasawa N, Fukuda T, Nagaoka M, Harada T, Takahashi H, Ikegami M. Aggregation and phosphorylation of α -synuclein with proteinase K resistance in focal α -synucleinopathy predominantly localized to the cardiac sympathetic nervous system. *Neuropathol Appl Neurobiol* 2018; 44(3) : 341-4.
- 12) Sato Y, Kudo SE, Ichimasa K, Matsudaira S, Kouyama Y, Kato K, Baba T, Wakamura K, Hayashi T, Kudo T, Ogata N, Mori Y, Misawa M, Toyoshima N, Ishigaki T, Yagawa Y, Nakamura H, Sakurai T, Shakuo Y, Suzuki K, Kudo Y, Hamatani S, Ishida F, Miyachi H. Clinicopathological features of T1 colorectal carcinomas with skip lymphovascular invasion. *Oncol Lett* 2018; 16(6) : 7264-70.
- 13) Okabayashi Y, Kanzaki G, Tsuboi N, Haruhara K, Koike K, Ikegami M, Shimizu A, Yokoo T. Heterogeneous distribution of glomerular size in adult kidneys with normal renal function. *Pathol Int* 2018 May 10. [Epub ahead of print]
- 14) Koide H, Kimura T, Inaba H, Sato S, Iwatani K, Yorozu T, Furusato B, Kamata Y, Miki J, Kiyota H, Takahashi H, Egawa S. Comparison of ERG and SPINK1 expression among incidental and metastatic prostate cancer in Japanese men. *Prostate* 2019; 79(1) : 3-8.
- 15) Miki J, Yanagisawa T, Tsuzuki S, Mori K, Urabe F, Kayano S, Yorozu T, Sato S, Kimura T, Takahashi H, Kishimoto K, Egawa S. Anatomical localization and clinical impact of sentinel lymph nodes based on patterns of pelvic lymphatic drainage in clinically localized prostate cancer. *Prostate* 2018; 78(6) : 419-25.
- 16) Hirabayashi S, Iwamoto M. Finite element analysis

- of biological soft tissue surrounded by a deformable membrane that controls transmembrane flow. *Theor Biol Med Model* 2018; 15(1) : 21.
- 17) Stolnicu S, Barsan I, Hoang L, Patel P, Terinte C, Pesci A, Aviel-Ronen S, Kiyokawa T, Alvarado-Cabrero I, Oliva E, Park KJ, Abu-Rustum NR, Pike MC, Soslow RA. Stromal invasion pattern identifies patients at lowest risk of lymph node metastasis in HPV-associated endocervical adenocarcinomas, but is irrelevant in adenocarcinomas unassociated with HPV. *Gynecol Oncol* 2018; 150(1) : 56-60.
- 18) Okonogi H, Kawamura T, Joh K, Koike K, Miyazaki Y, Ogura M, Tsuboi N, Hirano K, Matsushima M, Yokoo T, Horikoshi S, Suzuki Y, Yasuda T, Shirai S, Shibata T, Hattori M, Akioka Y, Katafuchi R, Hashiguchi A, Hisano S, Shimizu A, Kimura K, Maruyama S, Matsuo S, Tomino Y; Special IgA Nephropathy Study Group. A grading system that predicts the risk of dialysis induction in IgA nephropathy patients based on the combination of the clinical and histological severity. *Clin Exp Nephrol* 2019; 23(1) : 16-25.
- 19) Nakamura Y, Ise K, McNamara KM, Azmahani A, Sato S, Fujishima F, Joh K, Suzuki H, Mitsuzuka K, Arai Y, Takahashi H, Sasano H. The expression of sex steroid receptors and sex steroid-synthesizing/metabolizing enzymes in metastasized lymph nodes of prostate cancer. *Hum Pathol* 2019; 84 : 124-32.
- 20) Kamata Y, Sato H, Joh K, Tsuchiya Y, Kunugi S, Shimizu A, Konta T, Baughman RP, Azuma A. Clinical characteristics of biopsy-proven renal sarcoidosis in Japan. *Sarcoidosis Vasc Diffuse Lung Dis* 2018; 35(3) : 252-60.
- 21) Liu Q, Imaizumi T, Kawaguchi S, Aizawa T, Matsumiya T, Watanabe S, Tsugawa K, Yoshida H, Tsuruga K, Joh K, Kijima H, Tanaka H. Toll-like receptor 3 signaling contributes to regional neutrophil recruitment in cultured human glomerular endothelial cells. *Nephron* 2018; 139(4) : 349-58.
- 22) 柳澤孝文, 三木 淳, 安江圭史, 田中晴郎, 萬 昂士, 鷹橋浩幸, 木村高弘, 岸本幸一, 穎川 晋. 経尿道的膀胱腫瘍一塊切除術の臨床病理学的検討. *Jpn J Endourol* 2018; 31(1) : 100-7.
- 23) Takaki T, Ohno N, Saitoh S, Nagai M, Joh K. Podocyte contacts on mesangial cells at mesangial interposition of lupus nephritis: a three-dimensional analysis by serial block-face scanning electron microscopy. *Clin Exp Nephrol* 2019; 23(6) : 773-81. *Epub* 2019 Feb 8.
- ## II. 総 説
- 1) 清川貴子, 岩本雅美. 【婦人科がん-研究・臨床の新展開】 卵巣癌・卵管癌・腹膜癌 上皮性卵巣悪性腫瘍(卵巣癌)の組織分類をめぐるあらたな展開「卵巣癌」の多くは卵管由来か. *医のあゆみ* 2018; 266(1) : 97-101.
- 2) 梅澤 敬, 梅森宮加, 堀口絢奈, 土屋幸子, 春間節子, 沢辺元司, 九十九葉子, 池上雅博. BD サイトリッチ法による唾液腺腫瘍穿刺吸引細胞診の標準化と診断精度向上の試み. *医学検査* 2018; 67(4) : 421-9.
- 3) 清川貴子. 子宮体癌の病理 これだけは知っておきたい子宮内膜癌と前駆病変. *埼玉臨細胞会誌* 2018; 36 : 5-11.
- 4) 岩本雅美, 清川貴子. 【子宮腫瘍のトピックス】 子宮腫瘍の診断における免疫組織化学. *病理と臨* 2018; 36(8) : 794-801.
- 5) 清川貴子. 子宮頸部腺癌の病理をめぐる最近の話題. *病理と臨* 2018; 36(8) : 820-2.
- 6) 小林雅邦, 三石雄大, 炭山和毅. 【症例から学ぶ統一IEE分類】胃癌 典型例 MESDA-G 診断基準を満たす胃癌 早期胃癌 0-IIc 未分化型腺癌 absent MSP/irregular MVP (corkscrew pattern). *消内視鏡* 2018; 30(12) : 1752-3.
- 7) 清川貴子. Robert Scully's Memorial Lecture 卵巣癌に関する注目の話題 小細胞癌, 高カルシウム型, Krukenberg 腫瘍, 機能性間質を伴う腫瘍. *日婦腫瘍会誌* 2018; 36(2) : 110-7.
- 8) Pirog EC, Park KJ, Kiyokawa T, Zhang X, Chen W, Jenkins D, Quint W. Gastric-type adenocarcinoma of the cervix: tumor with wide range of histologic appearances. *Adv Anat Pathol* 2019; 26(1) : 1-12.
- 9) 岩本雅美, 清川貴子. 【婦人科がん(第2版)-最新の研究動向-】 子宮体がん 子宮体癌の診断 子宮内膜上皮内腫瘍(EIN)の概念と診断. *日臨* 2018; 76(増刊2 婦人科がん) : 402-5.
- ## III. 学会発表
- 1) Lu T, Ikegami M. Identification of informative microsatellite markers on chromosome 3p in Japanese patients. 第77回日本癌学会学術総会. 大阪, 9月. [日癌会総会誌 2018; 77回 : 121]
- 2) 佐藤 峻, 木村高弘, 萬 昂士, 岩谷洗介, 池上雅博, 鷹橋浩幸. 生検グリソンスコア 3 + 4 = 7 の症例におけるグリソンパターン 4 の割合と, 前立腺全摘検体における悪性病理所見の検討. 第106回日本泌尿器化学会総会. 東京, 4月. [日泌会総会 2018; 106回 : OP-299]
- 3) 千葉 諭, 三石雄大, 中村麻予, 遠藤泰彦, 濱谷茂治, 鈴木正章, 池上雅博. 劇症型 A 群溶連菌感染症

- の一剖検例. 第107回日本病理学会総会. 札幌, 6月. [日病理会誌 2018; 107(1): 510]
- 4) 深澤 寧, 中村麻子, 福田隆浩, 鷹橋浩幸, 池上雅博. 第3脳室脊索腫様膠腫の一例. 第107回日本病理学会総会. 札幌, 6月. [日病理会誌 2018; 107(1): 450-1]
- 5) 土井紀博, 廣岡信一, 鷹橋浩幸, 池上雅博. 空腸原発グロームス腫瘍と考えられた一例. 第107回日本病理学会総会. 札幌, 6月. [日病理会誌 2018; 107(1): 486]
- 6) 三宅美佐代, 土井紀博, 池上雅博, 鷹橋浩幸. Hybrid oncocytic/chromophobe tumor (HOCT) の2症例. 第107回日本病理学会総会. 札幌, 6月. [日病理会誌 2018; 107(1): 447]
- 7) 菊地 亮, 廣岡信一, 永吉陽子, 山田恭輔, 清川貴子. 若年女性に発生した子宮内膜癌肉腫 (ECS) の一例. 第107回日本病理学会総会. 札幌, 6月. [日病理会誌 2018; 107(1): 443-4]
- 8) 中村麻子, 濱谷茂治, 鹿 智恵, 千葉 諭, 羽村凌雅, 池上雅博. 稀な胃石灰化線維性腫瘍の一例. 第107回日本病理学会総会. 札幌, 6月. [日病理会誌 2018; 107(1): 437]
- 9) 廣岡信一, 原 裕子, 郷田憲一, 濱谷茂治, 池上雅博. NET G2を伴う Barrett 腺癌の一例. 第107回日本病理学会総会. 札幌, 6月. [日病理会誌 2018; 107(1): 434]
- 10) 萬 昂士, 佐藤 峻, 岩谷洸介, 池上雅博, 鷹橋浩幸. 上部尿路上皮癌における HER2 過剰発現と免疫組織化学的亜型分類についての臨床病理学的検討. 第107回日本病理学会総会. 札幌, 6月. [日病理会誌 2018; 107(1): 317]
- 11) 佐藤 峻, 萬 昂士, 木村高弘, 池上雅博, 鷹橋浩幸. 前立腺癌における生検グリソンパターン4の割合と, 術後悪性病理所見の比較検討. 第107回日本病理学会総会. 札幌, 6月. [日病理会誌 2018; 107(1): 317]
- 12) 岩本雅美. 間葉性異形成胎盤 (PMD) の診断と鑑別. 第107回日本病理学会総会. 札幌, 6月. [日病理会誌 2018; 107(1): 280]
- 13) 本澤恵璃, 稲山美智, 齋藤 歩, 戸田敏久, 春間節子, 中野雅貴, 鷹橋浩幸, 鈴木正章. 腹水中に肉腫細胞が出現した精索原発脱分化型脂肪肉腫の1例. 第59回日本臨床細胞学会総会 (春季大会). 札幌, 6月. [日臨細胞会誌 2018; 57(Suppl.1): 247]
- 14) 梅澤 敬, 原田 徹, 鷹橋浩幸, 清川貴子, 山田恭輔, 落合和徳, 岡本愛光, 磯西成治, 沢辺元司, 池上雅博. 子宮頸部擦過細胞診に於ける hyperchromatic crowded cell groups の観察法. 第59回日本臨床細胞学会総会 (春季大会). 札幌, 6月. [日臨細胞会誌 2018; 57(Suppl.1): 117]
- 15) Kiyokawa T. (Pathology Session: Recent Advances in Gynecologic Pathology: How We Got Here and Where to Go Next) Metastatic carcinoma to the ovary. 17th Biennial Meeting of the International Gynecologic Cancer Society (IGCS 2018). Kyoto, Sept.
- 16) Kiyokawa T. New issues in pathology of ovarian clear cell carcinoma interactive tumor board. 17th Biennial Meeting of the International Gynecologic Cancer Society (IGCS 2018). Kyoto, Sept.
- 17) 清川貴子. (教育講演 5) 「子宮頸癌取扱い規約第4版」で何が変わったのか. 第57回日本臨床細胞学会総会 (秋季大会). 横浜, 11月. [日臨細胞会誌 2018; 57(Suppl.2): 501]
- 18) 野木裕子, 風間高志, 三本 麗, 井廻良美, 神尾麻紀子, 塩谷尚志, 永崎栄次郎, 小林 直, 鈴木正章, 鳥海弥寿雄, 木下智樹, 内田 賢, 武山 浩. 40歳未満は術前化学療法後に慎重な経過観察と支援が必要である. 第26回日本乳癌学会学術総会. 京都, 5月. [日乳癌会プログラム抄集 2018; 26回: 457]
- 19) 城 謙輔. (教育講演 3) C3腎症からみた一次性膜性増殖性糸球体腎炎の再検討. 第53回日本小児腎臓病学会学術集會. 福島, 6月. [日小児腎臓病会誌 2018; 31(Suppl.1): 60]
- 20) 城 謙輔, 小川弥生, 小林高久. ANCA 関連腎炎に関する治療選択を考慮した新組織分類の提案. 第107回日本病理学会総会. 札幌, 6月. [日病理会誌 2018; 107(1): 318]

IV. 著 書

- 1) 清川貴子, 岡 輝明 (関東中央病院), 栗林康造 (兵庫医科大学), 藤本伸一 (岡山労災病院). 9. 腹膜中皮腫レビュー. 石綿・中皮種研究会, 日本中皮種研究機構, 日本肺癌学会編. 中皮腫瘍取り扱い規約. 東京: 金原出版, 2018. p.118-20.
- 2) 城 謙輔. 第3章: IgA 腎症の病理 IgA 腎症の Oxford 分類と我が国の組織学的重症度分類, IgA 腎症の電子顕微鏡的特徴. 湯村和子 (国際医療福祉大) 編. IgA 腎症の臨床. 東京: 東京医学社, 2018. p.63-77.
- 3) Kiyokawa T, Iwamoto M. Current concept of precancerous and early stage of serous ovarian carcinoma in pathology of female cancers. Moriya T (Kawasaki Med Sch) ed. Pathology of Female Cancers: Precursor and Early-Stage Breast, Ovarian and Uterine Carcinomas. Singapore: Springer Singapore, 2018. p.37-46.

V. その他

- 1) 村上雅哉, 木村高弘, 岩本雅美, 本田真理子, 石井

元, 小池祐介, 佐々木裕, 古田 昭, 三木健太, 池上雅博, 颯川 晋. 異時性5臓器5重複癌の1例. 泌紀 2018; 64(5): 231-4.

- 2) Morikawa K, Takenaga S, Masuda K, Kano A, Igarashi T, Ojiri H, Ueda K, Ishiyama M, Fukasawa N. A rare solitary fibrous tumor in the ischioanal fossa: a case report. Surg Case Rep 2018; 4(1): 126.
- 3) Hashimoto M, Kuriwa S, Kojima A, Minagawa S, Numata T, Hara H, Araya J, Kaneko Y, Nakayama K, Owada M, Aizawa D, Yorozu T, Suzuki M, Kuwano K. Aortic rupture involving matrix metalloproteinases 8 and 9 during *Staphylococcus aureus* pneumonia. Thorax 2018; 73(4): 397-8.
- 4) 大津将路, 大熊誠尚, 衛藤 謙, 諏訪勝仁, 池上雅博, 矢永勝彦. 潰瘍性大腸炎に発生した虫垂原発腺扁平上皮癌の1例. 日本大腸肛門病学会誌 2018; 71(5): 216-21.

ウイルス学講座

講座担当教授: 近藤 一博 ウイルス学, 分子生物学
 講師: 小林 伸行 ウイルス学, 精神医学

教育・研究概要

I. 教育概要

1. 医学科講義・実習

3年生のコース臨床基礎医学のユニット「ウイルスと感染」の講義を16コマ担当し、ウイルス学の基礎とウイルスと関係する疾患の基礎的な理解のための講義を行った。ユニット「ウイルス学実習」は、5コマの実習を行った。講義・実習ともに、ウイルス感染症の病態、診断、治療、予防など、将来、医師としてウイルス感染症に対処できるための基礎を学習することを重視した。さらに、最近の本学入学者の研究者指向に合わせるべく、医学者として、原因不明の疾患の研究、新しい感染症の出現、ウイルスを利用した医療に対応できる基礎力をつけられる様に配慮した。また、研究不正に関する内容も講義に盛り込んだ。ユニット「感染・免疫テュートリアル」、コース研究室配属のユニット「研究室配属」、「Early research exposure」も担当し、研究やテュートリアルを通して学生の感染症学への理解を深めることに努めた。

2. 看護学科講義

ウイルス学の講義を6コマ担当した。

3. 看護学校講義

慈恵看護専門学校においてウイルス学の講義を16コマ担当した。

II. 研究概要

疲労や疲労によってもたらされるうつ病などの疾患は社会的に大きな問題となっている。ウイルス学講座では、これらの問題に対し、ヘルペスウイルスの研究を通して解決することを目的としている。ウイルスは、寄生する宿主に完全に依存しているため、宿主との相互作用が強く、ウイルスの研究は、これまでにガン研究や遺伝子研究に多くの知見をもたらした。我々は、特にヒトとの関係が深い、潜伏感染中のヘルペスウイルスとヒトとの関係を探求することで、疲労や精神疾患の分子機構の解明を目的とした研究を行っている。

特に我々が研究対象としているのは、ほとんどの